

声をあげる、ということ。

奨励	加藤 良太〔かとう・りょうた〕
奨励者紹介	関西NGO協議会提言専門委員 同志社大学大学院総合政策科学研究科嘱託講師

「心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。」

(マタイによる福音書 5章3節)

新年を迎えたキャンパスで

新年を迎え、1月6日までのクリスマスシーズンも終えて、2016年も本格的な歩みに入ってまいりました。学生の皆さんにとっては、ひょっとすると、学期末の試験期間を控えて落ち着かない、何やらソワソワとした時期ということになるのかもしれませんが、同じキャンパスの中にあっても、このチャペルという空間、チャペル・アワーという時間は、そんな慌ただしさからひととき離れて、心と体をゆったりと開き、見つめ直すことのできる場所だと思います。皆さんにはこれからも、この空間・時間を各々のキャンパスライフのよき支えとして、生かしていただければと思っています。

そんな皆さんに、果たしてふさわしい話ができるかどうか分かりませんが、しばらくの間、私の話に耳を傾けていただければと思います。今日は「声をあげる、ということ。」と題して、少しばかり話してみたいと思います。

人が言葉を失う時

私たち人間は、さまざまな感情、喜び、怒り、哀しみ、楽しさ、喜怒哀楽の気持ちに心がグツと極まった時に、思わず「声をあげる」ということがあります。そこまでの感情の高まりがなくても、何かの不満や、逆に嬉しいことがあった時に、居合わせた相手に対して、思わず立て板に水のように言葉が口を衝いて出る、といったこともあるかと思います。しかしどうでしょう。人が本当に感極まった時、心に衝撃を受けた時、喜怒哀楽何であれ、心が張り詰めて仕方のない時に、それほど簡単に言葉を発することができるのでしょうか。「言葉を失う」との慣用表現にもあるように、言葉を発するどころか息をするのもやっと、心がぎゅっと押さえつけられたようになり、茫然自失の状態になってしまうというのが、人間の自然なありようではないでしょうか。

それでも、そうした状態に、嬉しいこと、楽しいこと、感動によってなるのであれば、それは幸せなことかもしれません。そんな状況を、たくさん経験できたらいいなとも思います。しかし、それが哀しみや怒り、憤り、不安、困難、苦痛によってもたらされたものだとしたら、大問題です。誰かがそんな状態なら、周りがなんとか気づいてサポートすることも必要でしょうし、自分がそうであるなら、しんどいかもしれないけれど、なんとか声を絞り出して、周りにサポートを求めている必要があるかもしれません。それでも、一時的にそうなるだけで、心が落ち着くことや、時間の経過が自然と解決してくれることもあるかもしれません。でも、いつまでも言葉を失っている人、声をあげられずに立ちすくんでいる人がいるとしたら、いよいよ、その人だけではどうにもならない問題、にっちもさっちもいかない状況、なんとかしなければならぬ環境が、そこにあるのかもしれない。誰かが、手を差し伸べなければならぬ状況が。

国際協力NGOの現場で

申し遅れましたが、私は関西NGO協議会という国際協力NGO、いわゆる途上国を中心とした海外で、飢餓や貧困、災害や疾病、暴力や紛争など人道的な問題で困難にある人々や地域を支援したり、その地域や人々が自立していくために支援することを主な役割とする分野の団体に属しています。私は今の担当柄、支援の現場で直接活動はしていませんが、こうした世界の人道的な課題を国際社会全体に知ってもらい、各国政府や国際機関が問題解決に動いてくれるよう促していく活動、アドボカシーに携わっています。こうした活動をしておりますと、社会の中で本当に困った状態にある人々、支援を必要としている人々というのがどのようなものであるのか、否応なしに突きつけられ、向き合わされることになります。

はつきり申しあげて、困っている人、支援を必要とする人が自ら「助けて!」と声をあげてくださることは非常に少なく、また難しいことです。先に挙げたさまざまな人道的な問題は、文字に並べれば漠然とした概念かもしれませんが、一人ひとりの身に降りかかってきたとすれば、本当に苦しいことです。生活面にとどまらず、身体面の苦しさや痛みもあり、心は追い詰められ、将来への希望も見通せず、文字どおり「声を失い」ふさぎこんでしまいます。また、さまざまな暴力や抑圧に苦しむ人々は、叫びたい思いがあったとしても、口を噤んで、暴力をやり過ごすしかありません。そのような状況で、具体的な支援のニーズを口に出すこと、声をあげることは困難なのです。ですから、私たちが支援する上での第一の仕事は、こうした人々が「声をあげる」ことができる状況をつくること、そこから始まります。それは、単に私たちが支援のニーズを把握し、支援メニューを組み立てられるという便宜上の理由からだけではなく、自らの状況と社会とのかかわりについて、自分の意志で、自分の声で発言する、声をあげる、ということが、困難な状況にある人々、時に抑圧され「人あつかい」されてこなかった人々にとって、一人の人間としての尊厳を回復し、自らの権利を誇りをもって用いて、自治自立を回復していくために、欠かせないことであるからです。ですから、私たちは時間が掛かっても、お仕着せの支援ではなく、支援を必要とする人々の声と出会い、声と向き合い、人々の声によって生活や地域を立て直し、やがて人々の声に送られて、私たちがその地を喜んで去る日を迎えることができるよう、じっくりと活動しています。

「声をあげる」を可能にするには

では、困難な人々が「声をあげる」ことを可能にするためには、具体的にどのようにすればよいのでしょうか。もちろん、私たちはそのために具体的な取り組みやスキルを用います。人々が口を噤まざるを得ない社会環境があれば、それを改善する努力をしますし、心身のケアが必要であればそれを、また、意見をまとめたり議論したり合意形成する技術が乏しければ、最近学生の皆さんにもお馴染みの「ワークショップ」や「ファシリテーション」の技法を用い、また人々に伝えて使ってもらえるようなこともします。ただ、いくら具体的な取り組みやスキルがあっても、支援する側にまっとうな「考え」や「姿勢」がなければ、結局のところ、お仕着せの支援になってしまいます。自分たちがやりたい事業のためだけに、うまく誘導して喋らせる、なんていうことにもなりかねません。では、そのような「考え」や「姿勢」とは、一体どのようなものなのでしょうか。

心の貧しい人々とは

私は、そのヒントとして、今日お読みいただいた聖書の箇所、マタイによる福音書5章3節は重要な示唆を与えてくれるのではないかと考えています。もう一度、この箇所を朗読してみます。

「心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである」。

この箇所は、山上の垂訓、山上の説教などと言われる有名な聖書の箇所の一部で、イエスが山の頂上で、弟子たちや大勢の群衆に語ったとされる、後にキリスト教の中心的な教義や祈りとして重んじられる内容がいくつも含まれる部分の冒頭にあたります。それだけに、この箇所はキリスト者、クリスチャンでない人たちにもよく知られていて、かつ、分かったような、分らないような、雲をつかむような不思議な感じを覚える一節でもあります。「心の貧しい人々」って何なのか。そんな人々が「幸い」でありえるか。そして「天の国はその人たちのものである」とは一体どういうことなのか。

私たちは「心の貧しい人々」とばっと聞くと、心が卑しい、品性下劣な人たちのことなのかな、と思ってしまいますが、それは違います。私たちが読む聖書は、古いギリシャ語やヘブライ語が原典としてあり、それを現代の日本語に翻訳したものであって、かつ、それをあまり説明的にならずにそのままに翻訳しているために、一つ一つの言葉がその時代に含んでいたさまざまな意味合いを、直接の言葉としては十分に表現されません。ですから、他の日本語の翻訳や研究者による説明を少し見てみると、より詳しい意味合いがつかめてきます。この箇所は、直訳的に言えば「霊において飢えている人たち」となります。つまり、心の底から疲れ果て、追い詰められ、困窮して、もう自分の中に何の誇りもないし、誰かを頼りにすることもできず、ただもう、神さまの助けにすがりたい人々、という意味合いです。言うなれば、今日の話で私が言うところの、「言葉を失った」「声をあげる」ことができない、困り切って、本当に支援を必要としている人々のことを指しているとも言えます。

心の貧しい人々が「幸い」?

そんな人々が「幸い」で、「天の国はその人たちのものである」なんて、どうして言えるのでしょうか。現実の世の中ではあまりに報われない人々を哀れんで、イエスが気休めで言ったことなののでしょうか。あるいは、死後の世界としての天国では報われるよ、だから苦しくても現実の生活を頑張ろう、と励ますつもりで言ったのでしょうか。それは違います。本当に困っている人々がそのまま「幸い」であるはずがありません。その状況は改善されなければなりません。しかし、どう改善されればよいのでしょうか。一つ言えることは、本当に困っている人々は、社会の中で最も人の弱さ、小ささ、苦しき、痛みなどを知り得る立場にあるということです。その立場に立つてこそ、この世の中をどのように変えていけば、そうした人々が救われる道が見つかるのか、はじめて見えてくるということです。それを「幸い」と言っています。別の日本語の翻訳では「神からの力がある」と表現するものもあります。キリスト教の神は盛んに「愛」を説かれます。神が私たち一人ひとりに寄り添い、イエスというひとり子を犠牲にしても、私たちを愛し抜かれた、それに倣って私たちも互いに愛し合いなさい、という教えです。皆さんもよくお分かりのように、それはとても難しいことです。でも、本当に厳しい状況におかれている人ほど、神さまの愛を渴望することの切実さが身に染み入って分かりうる、それを「神からの力がある」という言い方で表現されたのかもしれない。

そのような、厳しい状況にある人々が真に救われた、自らの尊厳をもって生きることができる世の中こそが「天の国」です。だから「天の国はその人たちのもの」なのです。天の国、別の表現では神の国とも言いますが、これは死後の世界や宗教的な終末後の世界のイメージを漠然と語っているわけではありません。具体的に、今ここから私たちが神の愛に倣って目指すべき世界のあり方のことです。しかし、その世界は一部の政治家やエリートの視点や、青写真に基づいて実現するようなものではありません。本当に貧しく、世間の片隅で弱く、小さくさせられて生きている、言葉を失った人々、声をあげられない人々の「視点」「立ち位置」「声」に基づいてこそ、実現されるべきものなのだ、ということを私たちに語っている、そういうメッセージなのだと思います。

私たちにに向けて語られていること

そうすると、この聖書箇所は、本当に困っている人々、声をあげられない当事者に向けて語られているというよりも、それ以外の世間一般の人々に向けて語られているのではないかとも思うのです。私たちは信仰の有無、宗教の違いに関わらず、健康や豊かさや幸せを願わない日はないと思います。この新年、ご家族や友人知人と初詣に行かれた方も多いと思います。年間行事として習慣的に行っているだけ、と言われる方もあるかもしれませんが、目を瞑り、両手を合わせて祈った姿の中には、それぞれに誠の祈りが込められていると思います。その中で、ご自分やご家族、親しい人々の幸せを祈ることは自然なことです。でも、キリスト教の神はその祈りの中に、加えられるべき、忘れられた人々はいませんか、と私たちに問いかけられているのです。新年の華やかで豊かな宴の席に着くことができなかった人、その戸口をくぐることをさまざまな理由でためらってしまった人、自分はそのようなものと縁遠い者だと心塞いでしまった人、そのような人のための祈りは、私たちの祈りの中に加えられていますか、私たちのなすべき発言や行動の中に加えられていますか、そんなことを、神さまは、イエスを通じて私たちに語りかけておられるのではないかと思うのです。

人々の息遣いと共にある「幸い」

よく、私たちNGOをはじめ国際協力の関係者が、「支援に行ったつもりが、かえって教えられることが多かった、本当の豊かさや幸福について教えられた」というようなことを語るのを読んだり聞いたりしたことがある方もおられると思います。それは、先ほどから申し上げてきた聖書箇所の意味合いを、まさに現場で、当事者である「声をあげる」ことができなかった人々、「言葉を失った」人々と共に過ごし、その人々が「声をあげる」ことができるようになるプロセスを共にする中で、痛感してきたゆえのことだろうと思います。カネやモノがないから、気休めに別の価値を強調して強がりと言っているとか、そういう話ではありません。人の生き方、社会のあり方のことです。豊かさや高度な社会システムが幾重にも積み重ねられ、生活も、仕事も、政治も、一つのベルトコンベアに乗っかるように、コンピューターのシステムに処理されるように、いつしか人の息遣いを失ったところで、一部の人が描いた青写真そのままに粛々と進められるようになってはいないか、そこから「人々の声」とりわけ厳しい状況にある人々の声が失われていないか、そのようなことを、反面として、素朴で手づくりではあるが、厳しいながらも自分たちの暮らしや地域をみんなの声でよくして、自治自立に導いていこうとする、人々の温もりや息遣いの中に生活する中で、気づかされるのだろうと思うのです。

新しい一年を望んで

私たちは今年一年、どんな生き方をしていくのでしょうか。公私ともにいろいろなことを行い、いろいろな出来事に向き合い、また、社会や世界も「想定外の」「未曾有の」などと形容される災害や紛争に遭遇していくことになるのかもしれませんが。激しい世の中の流れの中で、どうしたら、私たち一人ひとりは「人間らしく」「私らしく」生きていけるのか、いつも思い悩んでしまいます。そこにおいても「声をあげる」ということは、私たち一人ひとりが尊厳をもって生き、社会の中で一人の担い手としてコミットしていくことを諦めない、という決意と意志とを示す、とても重要なことではないでしょうか。私たち一人ひとりが厳しい状況にあっても「言葉を失う」ことなく「声をあげ」続け、誰かの細かい「声」にも耳を傾け、言葉を失っているような人がいれば、そっと共に寄り添って、一人ひとりのできるサポートをしていく、人としての温もりや息遣いを忘れない、そんな一年にしていきたいと思います。

2016年1月13日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録